
わたしの道

ゆず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしの道

【Nコード】

N0983Y

【作者名】

ゆず

【あらすじ】

日々の生活の中には喜びや楽しみもあるけど、不安や緊張もつきもの。ある日の？ちょっとした？出来事がきっかけで、その不安や緊張に少し弱くなってしまった少女、秋乃が、家族、友人、大学生活、初めての一人暮らしそして恋、いろんな人とのさまざまな経験を通して今の自分と向き合う姿を描いていきます。みんな一人、でも独りぼっちじゃないんだよ。

下手くそな文章ですが、丁寧に書いていこうと思います。

また不安障害、パニック障害の方、その周りの方への少しでも助け

になればと思います。

プロローグ

悠君が言った。

「人は生まれたその瞬間から、死に向かっているんだ。」

「じゃあ、今あの車に乗っているひと、今そのコンビニを出て行った人も？」

と私が聞くと彼は、

「そう、今救急車で運ばれた人も、たった今この世に生まれてきた子供も、俺も、お前も。」

そういわれると当たり前のことだ。わかっていたはずなのに、なんだか今初めて知ったような、驚きと妙な新鮮さを感じた。

ひどく沈んだ気分になり死にたくなるようなとき、確かに私は死に近づいていると実感する。しかし、気分が安定しているとき、私は本当に死に向かって歩いているのか。安定と不安定の間を常に行き来している私は、どこに向かっているのかわからなくなった。

私は、どこに向かっているのだろう、どこに向かうべきなのだろう。そこには一体何があるのだろう。

一人暮らし

だいぶ一人暮らしにも慣れてきた。

最初は、今考えれば笑ってしまつようなことでよく泣きながら親に電話をした。よく覚えているできごとが2つある。まず一人暮らし初日の夜、夕飯を作っている途中で包丁で指を切ってしまったときに、絆創膏の前に私は母親に電話をした。はじめは母も驚いていたが、事情を知ると私の混乱のしようにこちらの耳がキンキンしておかしくなりそうなくらいに大声で笑い、それからその混乱を心配し、指の心配は一切しなかった。

そしてもう一つは、「虫」だ。その日、学校が終わるといつものように私は家に帰りドアを開けた。そしたら部屋のどこからか虫が羽をこすらせる音がした。わたしは何かと思ひその音のするほうへ目をやり虫の居所を探すと、私のベッドの枕元に確かに虫がいた。だがわたしは小学校のときから虫が嫌いで、コオロギとケムシの区別ができなかつたくらい虫に触れてこなかった。よって私は、それが何虫なのか特定できなかった。そしてアパートの廊下で私は泣き、今度は父親の携帯へと電話した。私は今のこの状況とそれはどんな虫なのかを泣きながらマシガンのように熱弁した。その熱弁を仕事帰りだった父はかつたるそうに聞き、一通り聞き終わるとめんどくさそうに、

「いいか、お前虫が怖くて泣いてるみたいだけどよ、本当に怖がつてるのは虫のほうなんだぞ。殺されるかもしれないって泣いてるかもしんねえぞ。俺は虫がかわいそうに思う。逃がしてやれ。それができないなら、ほら殺虫剤あるだろ？あれで殺せ。じゃ、まあ頑張つてね。」

と、私ので、私の反論がはじまる前にそそくさと電話を切った。

私は彼の対応に唾然として少しのあいだその場に立ち尽くした。しかしそのおかげで涙も枯れた。これは一人でやるしかない、と思い

決死の覚悟でおそろおそろのドアを開けてみた。そしたらもう虫はいなくなっていた。あれっ？と思い部屋中を見回したがやっぱり虫はいなくなっていた。それでも念のため殺虫剤を部屋に軽くふりまき、私と虫の戦いは終結した。結局何もしてないのに達成感と自分の成長を感じ、根拠のない自信が湧いてきたのを覚えている。

まあ、何かあってもその時になれば何とかなるのだ。

そう思ったときずっと入りっぱなしだった肩の力がすこしだけ、抜けた。

そんな感じであれ以来今のところ虫は出ていないし、最初は料理を作るのに一時間はかかったのが、七か月たった今では三十分もかからない。スムーズにひとつの料理を作れるようになった。が、手の込んだ料理もしくなっただともいえる。料理にかかる時間が三十分少なくなっただから、理屈でいえば三十分自由な時間が生まれたはずだ。だが、それが生まれないから不思議でしようがない。家事をやってシャワーを浴びてレポートを終わらせると大体時計は十二時をまわっている。

友達と飲みにでかけることは滅多にしない。集団が苦手に変に緊張するからだ。遊びに行くのと体調が悪くなるのがなんとなく予想できるため、誘われただけで鼓動が速くなるのを感じる。なので誘われても断ったり流していたりしたら、最近ではもはやあまり誘われなくなった。

そんなわけで学校が終わったら家に直帰する私は毎日家でこんな生活を送っていた。「一人暮らして寂しくないの？」と聞かれるが全然寂しくはなかった。むしろ誰からも干渉されないこの生活を心地よく感じていた。

家は大学からは目と鼻の先にあった。でもそれ以外は延々と田んぼが続く田舎だった。家から一番近い店は1キロ先のコンビニだった。すごく遠いわけではないが、コンビニならではの手軽さというものは存在しなかった。でもわたしは、この不便さが嫌いではなかった。どこへ行くにも時間がかかるが考えてみれば時間に追われる

ようなこともなかった。むしろ田んぼ道を自転車で走っていると、何にも追われていない自分への‘余裕’のようなものを感じることができ、とても穏やかな気持ちになれた。

そして、わたしはそんな自分が少し誇らしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0983y/>

わたしの道

2011年11月1日19時23分発行